The Japan Society of Educational Sociology

教育社会学研究第74集（2004）

シンガポールの教育とメリトクラシーに関する社会学的研究
――再加熱装置としての技術教育校――

シム・チュン・キャット
(Sim Choon Kiat)

1．問題の所在

本稿の目的は，厳しいトラッキング制度を有するシンガポールを取り上げ，競争教育における「敗者」のプロフィールを描いたうえで，「敗者」を受け持つ技術教育校の役割を解明することにある。

シンガポールは中国系76.8%，マレー系13.9%，インド系 7.9%とそのほかの民族からなる典型的な多民族国家であり，国籍を有する人口が 300万人強しかないという小国でもある（国勢調査 Census 2000)。離島を除けば，国土の面積も604km²と狭く，東京23区よりもひと回り小さい。国家の発展と未来を担うエリートを選出するために，初代首相・現上級相であるリー・クアン・ユー氏らが率いる与党・人民行動党は，限られた人的資源をメリトクラシーに基づいて合理的に配分しながら，稀少な才能を効率的に吸収する社会システムを築いてきた。教育制度の面でも，三線分流型のトラッキングが1979年から実施され，小学校五年生から中等後教育までの各段階において，生徒を学力・習熟度別にふるい分ける。しかも，インターナショナル・スクールへのシンガポール人の入学が原則的に禁止されているうえ，私立学校もほとんど存在しない(1)。そのため，国内で教育を受ける以上，すべての国民はその選抜制度に従うことを余儀なくされる。それゆえに，否が応でも生徒にレッテルが貼られてしまい，クラークの言葉を借りれば，「失敗は公となる」のである(Clark 1960, p. 571)。

シンガポールの教育競争は，その形態に着目する限り，まさにローゼンバウムの

東京大学大学院

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

研究が指摘したトーナメント移動型である（Rosenbaum 1976）。しかも，その教育トーナメントは全国レベルで行われるというのがシンガポールの特徴である。ローゼンバウムによれば，トーナメント移動は「増幅効果」を生じ，早期選抜に選ばれた者のモチベーションを高めるのに対し，逆に選ばれなかった者の学習意欲を一段と低下させる。この説に従えば，シンガポールでは「増幅効果」が早い段階であらわれ，アスピレーションが小学校五年という早期に自ずと縮小，冷却してしまうとともに，学習意欲も低下してしまう「極寒状態」の生徒がいてもおかしくなかろう。そこでエリートの選出と育成を大前提とするシンガポールの教育制度では，これら「極寒状態」の生徒にどのように対処しているのかが問われる。「頭脳国家」（田村 1993）といわれているシンガポールは，頭脳競争で負けた非エリートたちをアスピレーションの低いままにほうっておくのか，あるいは非エリートであろうと，貴重な人的資源として頭脳の最後の一滴まで絞りきるのかが本稿の出発点となる問いである。

2．先行研究のレビュー

メリトクラシー（Young 1958）の正当性を維持するためには，できるだけ多くの人々をその選抜過程に積極的に参加させ，「勝つ」ことに対してかかわりを持たせなければならない（Hopper 1968）。したがって，選抜が行われる以前に，被選抜者を社会的に上昇したいというアスピレーションの達成に向けて「加熱」させておかなければならない。しかし選抜は「勝者」とともに多数の「敗者」をも生み出してしまう。これら「敗者」たちの抱くネガティブな感情を削ぐためには，選抜が行われた後，今度はさまざまな手段や仕組み，戦略を用いて「敗者」たちのアスピレーションを「冷却」させるなり（Clark 1960），「再加熱」させるなりしなければならない（竹内　1995）というのが「敗者」をめぐるこれまでの理論の主流である。

しかしここで看過できないのは，上述した理論のいずれも決定的な選抜を遅い時期に行うアメリカと日本という二つの類似性の高い教育体系を研究対象としていることである。本稿が対象とするシンガポールのように，決定的な選抜を早期に行う教育体系においては，「敗者」のタイプも違えば，「失敗」への適応過程も異なってくるはずであると考えられる。カラベルの言葉を借りれば，「11歳の子どもの進路を分けるのと，もう成人に近い18歳の青年をそうするのとでは，明らかに違っているのである」（Karabel 訳書　1980，89頁）。ところが，シンガポールは，制度的には旧宗主国のイギリスの影響を強く受けているものの，そこで観察される実態は，ター

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ナーが「庇護移動」(Turner 1960) とよんだものとは全く異なり，選抜後でも競争が続き，「敗者」ですら第3回国際数学・理科教育調査（略称 TIMSS）で高い点数を獲得するという，非常に独特な様相を呈している。したがって，日米型の「競争移動」とも，ヨーロッパ型の「庇護移動」とも異なるシンガポールの競争教育にメスを入れることによって，「敗者」をめぐるこれまでの教育社会学における選抜の理論に，新たな視点を提供することが大いに期待できよう。

3． シンガポールの教育に関する研究

厳しいトラッキング制度を貫きながらも，TIMSS では上位をほぼ独占したシンガポールの教育制度は，近年注目を浴びるようになった。しかし注目度が上昇したとはいえ，シンガポールに関する教育研究のほとんどは教育と経済発展・国造りの関係を考察したもの，もしくはシンガポールを射程に入れた東アジアの発展と教育についての研究の一環としてのもの，であるといわざるを得ない(Green 1997; Cummings 1997 など)。アジアでは類をみないシンガポールの教育・経済・社会・政治制度が東アジアモデルの一員として扱われることに対していささか疑問があることはさておき，それらの研究はほぼ例外なくトラッキングや階層に関する分析視点に欠けているという点で共通している。同様に，日本において，シンガポールに関する教育研究は多少なりともあるものの，上述した領域に限られるもの，あるいは政府系の調査と異ならない一般的な教育事情や政策の報告がきわめて多いというのが現状であり(池田　1999；大原　1997など)，学校の現場に入り生徒を対象とした調査はほとんどない。

一方，「理系重視・文系軽視」という観念の強い，プラグマティックなシンガポールにおいても，社会学的な分析視点を取り入れた教育研究は稀である。数少ない教育社会学的研究のなかに，民族，ジェンダーや親の職業が及ぼす教育達成への影響についての分析はあるものの (Chang 2002; Xiang 1993; Quah et al. 1991 など)，そのほとんどは国勢調査や労働調査などのマクロデータに基づいたものであり，また教育達成を表す指標として教育年数のみを使う傾向が強い。言うまでもなく，シンガポールにおいて，同じ教育年数でもトラックによってその実質は大いに異なる。それゆえに，シンガポールの教育制度に関する研究分析を行う際に，トラッキングの視点を抜きにしては，全体像を描ききれない危険性がある。

シンガポールの教育に関する社会学的研究の乏しさのいまひとつの理由として，教育への政府による中央集権的な統制の強さがあげられる。完全独立した1965年か

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ら今日に至るまで，シンガポールは事実上の一党支配体制を維持させてきた。そのため，与党・人民行動党のコントロールが社会の隅々にまで行き渡っており，政府の定めた政策は，何の反発もなく即刻完全実施という態勢が存在している。当然ながら，この傾向は政治・経済面のみならず，教育界や学校現場にも及ぶ。Chang (2002, p. 15) によれば，「シンガポールの学校はそれぞれの名声，ランキングおよび教育省との関係について非常に慎重であるため，研究者によるアカデミックな調査にはあまり協力したがらない」のである。

メリトクラシーを擁護しているシンガポールは，民族を問わず教育機会が制度上は均等に保証されているため，結果の不平等は個人のメリットによって説明される社会でもある。このような政治・社会的背景を考慮すれば，シンガポールの教育に関する国内外の研究のなかで，教育機会の平等を図ろうとする政策の分析や研究が多い反面，結果の平等・不平等を問うような調査が「センシティブ」という理由から少ないということも頷けよう(2)。しかしまさにこの理由から，選抜の「敗者」のアスピレーションについての研究はもちろん，トラッキングと階層という，選抜理論の中心的課題すらシンガポールでは明らかになってない。「ウルトラ・メリトクラティック」(Rodan 1989) とまでよばれているシンガポールにおいても教育達成にはやはり出身階層の影響を完全に除くことは不可能なのか，またいわゆる「敗者」はシンガポールでどう扱われているのかという初発の問題設定を明らかにするためにも，「敗者」の実態がどうなっているのか，それを詳細に分析する必要があるだろう。

4．分析課題の設定

以上の議論をふまえ，本稿は次の3つの分析課題を解明することを目指す。

(1) シンガポールのトラッキング制度においては，生徒たちがそれぞれの能力に一番適したペースで学習できるように，コースごとに異なるカリキュラムの範囲や難易度を設定している。したがって，ローゼンバウムの「増幅効果論」によれば，いったん下位コースにふるい分けられた生徒の「復活」は非常に難しいと考えられる。そこで本稿が検証する〈課題1〉は，下位コースにふるい分けられた生徒はその後も下位コースに入れられる可能性は高いのか」，である。

(2) クラークの描く不透明な「冷却」の過程について，カラベルは，知的基準をめぐる矛盾だけでなく，隠された階級的矛盾をもあらわしていると指摘した。アメリカのコミュニティ・カレッジにおいて，転学コースの学生と比べて，職業ない

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

し技術コースの学生の出身階層が相対的に低いことをカラベルは立証したのである（Karabel 1977）。

カラベルの主張に従えば，教育機会の平等を図ろうと努めるシンガポールにおいても，教育達成に及ぼす出身階層の影響を完全に取り払う可能性が低いと考えられる。したがって，本稿の〈課題2〉は，「メリトクラティックなシンガポールにおいて，教育選抜における『敗者』の出身階層は低いのか」について検証する。

③「増幅効果論」によれば，早期に選ばれなかった者の学習意欲は低下し，アスピレーションも冷却させられたままに低いと推測できる。そこで本稿の〈課題3〉として，「シンガポールの厳しいトラッキング制度において，『敗者』のアスピレーションと学習意欲は低いのか」，という分析課題を立てる。

5．「敗者」の定義

シンガポールの選抜制度において，小学校五年生ですでに「敗者」は存在する。しかし本稿が注目したいのは，選抜がほぼ最終段階に入っている中等後教育[3]である。幾重の失敗を重ね，それでも中等後教育機関への入学を選択した者に本研究はスポットを当てたいからである。

表1　中卒者が進学できる公的教育機関（2002年現在）

教育機関	学校数	修得資格	入学の最低条件＊	コーホートにおける入学者数の割合＊＊
1 ジュニア・カレッジ（2年制） Junior College	15	GCE 'A' レベル (Advanced)	GCE 'O' レベル (Ordinary) 6科目合格	約25%
セントラライズド・インスティテュート（3年制） Centralised Institute	2			
2 ポリテクニック Polytechnic	4	ディプロマ Diploma	GCE 'O' レベル 3科目合格	約40%
3 技術教育校 Institute of Technical Education	10	サティフィケート Certificate	GCE 'N' レベル (Normal) の修了	約25%

注＊　ここに示す入学条件は一番入りやすいコースを基準にしたものである。
注＊＊　ITE本部の職員に対する聞き取り調査による。

シンガポールでは，中卒者が入学できる公的教育機関は，表1に示す通り，ジュニア・カレッジ（Junior College, JC），セントラライズド・インスティテュート，ポリテクニックと技術教育校（Institute of Technical Education, ITE）だけである。ただし，これらの教育機関に入学しない残りの10%の者には，軍事学校，ホテル学校や民営の情報・ビジネス専門学校に入るか，もしくは就職するかという道は

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ある。

大学に入るための一番ストレートな方法は，JCかセントラライズド・インスティテュートに進学し，GCE 'A' レベル[4]の資格を取得することである。しかし表に示す通り，これらアカデミックな高校への入学は難しく，同じコーホートにおける入学者数は25%しかいない。これとは反対に，技術教育校であるITEへの入学条件はJCなどに比べて非常にゆるいことが表からわかる。ITEには，レベルの一番低いGCE 'N' レベルでも，修了さえすれば入学できるコースも設置されているのである。ちなみに，ITEはしばしば揶揄の対象として 'It's The End' の略だといわれることもあり，そこへ入ったら終わりだとみなされることもある。

したがって，選抜制度から漏れた「敗者中の敗者」はJCやポリテクに入学できないGCE 'O' レベル所有者と，最初からJCやポリテクへの入学資格さえ持たないGCE 'N' レベルの所有者である。本稿の調査対象にあたるのがITEの在学生なのである。

6. データと方法

本稿は，主にITEの生徒を調査対象とし，さらに彼らの意識や行動様式をより浮き彫りにするために，比較対象としてITE生徒とは対極的なエリート的存在ともいえるJC生徒を選んだ。調査は2002年8～9月に2校のJCと3校のITEで実施した。方法としては，インターネットを通じてのオン・ライン自記式英文質問紙ホーム・ページを使用し，そこへ生徒にアクセスしてもらい，自由な時間に答えてもらった。1校につき，IDとパスワードの書いてある200枚のカードを配り，200名の最終学年生徒の無作為抽出を各学校に依頼した。ただし，対象校の選出は無作為抽出によって行われたのではなく，本調査の趣旨に沿ってシンガポール教育省にランクの異なるJCとコースの異なるITEを対象校として選んでもらった。したがって，本稿の分析と解釈にはこの点を考慮していただきたい。対象校のプロフィールと生徒のサンプル数は表2にある通りである。

本調査がシンガポール教育省のサポートを得ていたこともあり，各対象校は非常に協力的でオン・ライン質問紙の回収率はどの学校においても100%に達した。なお，生徒を対象とした質問紙調査以外に，各対象校の管理職（校長，教頭，教科主任など），教師と生徒，および教育省やITE本部の職員に対する聞き取り調査も行った。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

表 2　対象者校のプロフィールとサンプル数

学校	類型	修得資格	調査対象に当たる最終学年在学者数	サンプル数（女性数）
A1 校	JC (Top-5)＊	GCE 'A' レベル	880	184 (111)
A2 校	JC (Non Top-5)	GCE 'A' レベル	800	187 (88)
			計	371 (199)
B1 校	ITE	ハイヤー・サティフィケート	802	186 (27)
B2 校 ＊＊	ITE	▪ハイヤー・サティフィケート	349	105 (75)
		▪サティフィケート	735	94 (79)
B3 校	ITE	サティフィケート	897	188 (34)
			計	573 (215)
			合計	944 (414)

注＊　'Top-5 JC' は、毎年「JC 学力ランキング表」で常に上位 5 位にランク・インされる 5 校のトップ JC の略称であり、'Non Top-5 JC' はそれ以外の 10 校の JC の略称である。
注＊＊　B2 校のサンプルに女子が圧倒的に多いのは、その学校のコースのほとんどが商業科か看護婦科のためである。逆に、B1 と B3 校のコースが技術・工学系のもののみであるため、男子がサンプルの大多数を占めている。

7．分析

7.1．「敗者」の出身コース――課題 1 の検証

表 3　小・中学校のコース　(%)

学校タイプ	小学校コース			中学校コース			
	EM1 (上位)	EM2 (中位)	EM3 (下位)	'O' レベル Special (上位)	'O' レベル Express (中上位)	'N' レベル Academic (中下位)	'N' レベル Technical (下位)
ITE	1.2	79.0	19.7	0.6	13.8	40.3	45.4
JC	61.2	37.7	1.1	50.0	48.1	1.7	0.3
全国レベル＊	17.1	67.4	15.6	9.7	52.2	24.5	13.5

注＊　全国レベルの生徒割合は 1999 年から 2001 年までの全国データの平均値である。
（出所：シンガポール教育省、*Key Education Indicators.*）

表 3 は，質問紙調査から得られた，ITE 生徒と JC 生徒との小・中学校コースの相違を示している。表に示す通り，かつては上位の EM 1 コースにいたという生徒が JC では61.2%もいるのに対して，ITE の場合は 1.2%しかいなかった[5]。逆に，19.7%の ITE 生徒が以前は下位コースの EM 3 だったと答えており，全国レベル

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

のデータよりも高かった。中学校コースについても同様で，JC 生徒の98.1%が中学校では上位か中上位コースに入っていたのに対して，85.7%ものITE 生徒は中下位か下位コースの中卒者であった。

以上のことから，小・中学校におけるトラッキングがいかに生徒の進路に影響を及ぼしているかがうかがえる。中学校で中下位か下位コースに振り分けられたため，または小学校5年生の時点で下位コースに振り分けられたために，ITE への進学が唯一のルートになる確率は格段に上昇し，逆に JC への狭き門をくぐる機会すらも与えられなくなる。シンガポールのトラッキング制度は，ローゼンバウムの「増幅効果論」のごとく流動性に欠け，下位コースにいったんふるい分けられた生徒はその後も下位コースに入れられる可能性が高いことが認められる。

7.2. 「敗者」の出身階層——課題2の検証

表4　出身階層　(%)

学校タイプ	世帯月収（S$1～¥65）			父・職業（母・職業）	
	>S$7000	S$2000 ～S$7000	<S$2000	専門・管理職	その他
ITE	2.9	37.3	59.8	28.8 (11.8)	71.2 (88.2)
JC	21.2	56.8	22.0	59.1 (23.2)	40.9 (76.8)
全国レベル*	20.9	52.5	26.6	—	—

学校タイプ	父・学歴（母・学歴）			
	大卒かそれ以上	中等後教育（ポリテクを含む）	中卒（'O' か 'N' レベル）	中卒以下
ITE	4.4 (1.9)	10.1 (6.5)	17.0 (18.3)	68.6 (73.2)
JC	29.0 (15.1)	21.9 (19.5)	21.6 (32.4)	27.4 (33.0)
全国レベル*	6.7	14.6	26.1	52.5

注*　全国レベルにおける世帯月収および親・学歴の分布は国勢調査 Census-2000 から取ったデータである。ただし、親・学歴の全国データは調査対象の親年齢にあたる 45~54 才人口の男女平均値を取った。

表4に示すように，世帯月収に関して，ITE 生徒の6割近くが低所得家庭(<S$2000)の出身者であることがわかる[6]。親の職業をみると，父親か母親が専門・管理職の JC 生徒の割合のいずれも ITE 生徒のそれより倍以上であることがわかる。親の学歴に関しては，JC 生徒の親の場合，中等後教育以上の学歴を持つ父親と母親の割合はそれぞれ50.9%と34.6%になっており，両方とも全国レベルの割合を上回っている。それとは正反対に，ITE 生徒の親の場合，中卒かそれ以下の学歴を持つ父親と母親の割合はそれぞれ85.6%と91.5%で，全国レベルのデータよりも高

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

かった。

メリトクラシーを貫くシンガポールにおいても，カラベルが指摘した「階級的矛盾」が隠されており，教育達成に及ぼす出身階層の影響が完全に取り払われることはなかった。教育選抜における「敗者」の出身階層はやはり低いのである。

ところで，JC 生徒の世帯月収に注目すると，その分布が全国レベルのデータに非常に類似していることが興味深い。シンガポールにおいて，エリート校である JC への進学に関して，中・高所得層が特に恵まれていることはないといえる。このことがシンガポールが「ウルトラ・メリトクラティック」と呼ばれるゆえんのひとつであろう。しかし ITE 生徒のなかに，低所得家庭の出身者が集中しているという事実は変わらない[7]。

7.3. アスピレーションと学習意欲——課題 3 の検証

これまでの検討で，シンガポールの「敗者」たちの多くはひたすら下位コースをたどり，出身階層もエリートの JC 生徒と比べて相対的に低いことがわかった。ローゼンバウムの「増幅効果論」に従えば，選抜がほぼ最終段階にさしかかる中等後教育段階では，「敗者」たちのアスピレーションは「極寒状態」になっているはずだと考えられる。ところが，この推測とは異なる結果を本調査は得たのである。

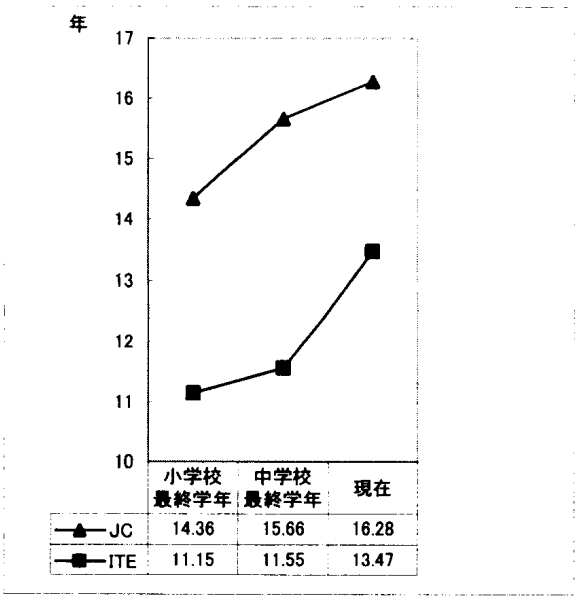

図 1　教育アスピレーションの変化

図 1 は，調査時に複数の時点を回顧してもらって得たそれぞれの時点での希望進学段階を教育年数に換算し[8]，JC・ITE 生徒別に各時点の平均値をプロットし，ア

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

スピレーションの変化の状態をあらわしたものである。これをみると，JC生徒とITE生徒の間に，小学校という早い時点から一貫して教育アスピレーションの絶対的な水準に差があり，JC生徒のほうが圧倒的に高い水準にあることがわかる。JC生徒のほとんどが小・中学校における上位コースの出身者で，逆にITE生徒の大多数が下位コースの出身者ということを考えれば，この教育アスピレーションにおける大差も驚くことではない。シンガポールの厳しいトラッキング制度がいかに下位コースの生徒を冷却させてきたのかがうかがえる。それよりもむしろ注目に値するのは，JC生徒のアスピレーションが徐々に高まっているのに対し，ITE生徒の場合については，小・中学校では低かったアスピレーション水準がITEへ入学した後の現在において急激に高まったということである。

表5　学校外での学習時間の分布　(%)

学校タイプ	しない	30分まで	30−60分	1−2時間	2−3時間	3−4時間	4−5時間	5時間以上	平均(分)	標準偏差	ケース数
JC	4.6	8.1	11.1	24.1	21.7	17.1	6.0	7.3	136.5	91.1	369
ITE	17.1	11.5	17.1	20.2	12.7	9.6	4.9	6.8	[illegible]	97.9	375

アスピレーションが高まれば，学習意欲も向上すると推察できる。そして学校外での学習時間に注目することによって，アスピレーションと学習意欲がいかに行動化されているかがわかる。表5より，大学入学試験にあたるGCE 'A' レベルを控えたJC生徒のほうがITE生徒よりも学校外での学習時間が長いことがわかる。例えば，JC生徒の半分以上（52.1%）が毎日2時間以上勉強しているのに対して，2時間以上勉強しているITE生徒は34%だけであった。しかし表5における比較はあくまでエリートであるJC生徒と選抜制度の「敗者」であるITE生徒とのものである。つまり，逆に考えれば，「敗者」であるにもかかわらず，ITE生徒の3人に1人が2時間以上勉強しているのである。しかも，平均値[9]を算出すると，JC生徒の2時間16分に対し，ITE生徒は1時間42分と，34分だけ短いにすぎない。ちなみに，1997年における日本の普通科上位高校と中位高校の生徒の学校外での学習時間はそれぞれ2時間8分と1時間23分であった（樋田ほか　2000，152頁）。したがって，ITE生徒の平均学習時間は日本の普通科中位高校の生徒のそれよりも長いことになる[10]。

ITE生徒の学習意欲がどのような要因によって規定されるのかをみるために，学習意欲を表す指標としての学習時間を従属変数とした重回帰分析を行った。説明変数とその数量化の手続きは表6の通りである。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

表 6　分析に用いる従属変数と説明変数

従属変数	
学習時間	しない＝0（分）、30 分以下＝15、30 分～1 時間＝45、1 時間～2 時間＝90、2 時間～3 時間＝150、3 時間～4 時間＝210、4 時間～5 時間＝270、5 時間以上＝330
説明変数	
男子ダミー	男子 ＝1、女子 ＝0
父・母学歴	修士かそれ以上＝18、大学＝16、ポリテク・'A' レベル＝13、ITE＝12、'N' か 'O' レベル＝10、中学校中退＝8、小学校＝6、小学校以下＝0
父・母職ホワイトダミー	専門・管理職＝1、それ以外の職業＝0
世帯月収	S$10000 以上＝13、S$7000~S$10000 未満＝10、S$4000~S$7000 未満＝7、S$2000~S$4000 未満＝4、S$1000~S$2000 未満＝2、S$1000 未満＝1
現在コース	ハイヤー・サティフィケート=1、サティフィケート= 0
中学校コース	'O' レベル ＝1、'N' レベル= 0
学校成績	下位 ＝1 ～ 上位 ＝7 の 7 段階
進学アスピレーション	ポリテクかそれ以上の学歴を望む＝1、それ以外の学歴（ITE サティフィケートを含む）か未定＝0
セカンド・チャンス要因	「シンガポールの教育は『敗者』にセカンド・チャンスを与える制度だ」という質問に対して、そう思う＝1、そう思わない＝0
将来展望要因	「将来の仕事の展望がみえる」という質問に対してはい＝1、いいえ＝0

表 7　ITE 生徒の学習時間を規定する要因分析（重回帰）標準回帰係数

	モデル 1	モデル 2	モデル 3	モデル 4
男子ダミー	−.133**	−.115*	−.106*	−.110*
父学歴	.055	.060	.057	.053
母学歴	.031	−.020	−.015	−.002
父職ホワイトダミー	.036	.096	.091	.074
母職ホワイトダミー	.042	.040	.034	.043
世帯月収	.003	−.057	−.059	−.050
現在コース	—	.230***	.215***	.220***
中学校コース	—	−.147**	−.143**	−.134**
学校成績	—	.156**	.144**	.137**
進学アスピレーション	—	—	.108*	.113*
セカンド・チャンス要因	—	—	—	.119*
将来展望要因	—	—	—	.168**
adj. R^2	.018	.088	.097	.144
F	2.604*	5.143***	5.127***	6.312***

注）*p<.05,　**p<.01,　***p<.001

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

表7に示すように，どのモデルにおいても，男子ダミーは学習時間に有意な影響を与えていることがわかる。その係数が負であることから，男子よりも女子のほうが学習時間が長いことが推測される。しかし出身階層を示す両親の学歴，職業および世帯月収のいずれも統計的に有意ではない。これはおそらくITE生徒の出身階層が両親の学歴，職業および世帯月収のいずれにおいても，もともと非常に低いからであろう(表4)。それに対し，現在コース，中学校コースおよび学校成績はいずれも統計的に有意である。係数の正負を考慮すると，これはレベルのより高いハイヤー・サティフィケート・コースのITE生徒が，またITE生徒の8割以上を示す'N'レベルの出身者が，そして学校成績がより良いITE生徒が，学習時間が長いことを意味する。

次に，進学アスピレーションについてみると，ほかの要因を統制したうえでも，学習時間に対して有意な効果を持つことがわかる。このことは，ポリテクやそれ以上の学歴を望むITE生徒が，そうでない生徒もしくは進路が未定の生徒より学習に時間を費やしていることを意味する。先に，図1でITE生徒の進学アスピレーションがITEへの入学後に高まったことをみたが，このように実際に学習行動につながっていることがわかる。また，セカンド・チャンス要因と将来展望要因に関しては，ほかの要因を統制した後でも，学習時間に有意な影響を及ぼすことがモデル4から確認される。すなわち，セカンド・チャンスを与えられていると思っている生徒ほど，または将来の仕事の展望がみえる生徒ほど，学習時間が長いのである。

8. 考察

以上の分析から，シンガポールの技術教育校ITEは，トラッキング制度によって産出される「敗者」たちに技術教育を施すだけでなく，重要な役割がもうひとつあることが示唆された。それはすなわち「敗者」たちにセカンド・チャンスを与え，将来の仕事の展望を持てるようにさせることを通して，彼らのアスピレーションを再活性化させることである。

本稿で明らかになったように，シンガポールの厳しいトラッキング制度のもとで，アスピレーションが早い段階から冷却させられたままの生徒が少なからずいる。またこれら「敗者」のほとんどは，小・中学校において上位コースとはひたすら無縁であった者であり，出身階層も低い。まずこのことは，シンガポールのトラッキング制度がローゼンバウムの「増幅効果論」のごとく流動性に欠けていることを意味し，メリトクラシーを国造りのイデオロギーとするシンガポールにおいても，教育

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

達成に出身階層が及ぼす影響を完全に取り除くことができなかったことを例証するものといえる。

ところが,「敗者」であるITE生徒は,ITEへの入学後に,それまで低かったアスピレーションが上昇するばかりでなく,エリートであるJC生徒と比肩できるほど学習に時間を費やしていることも本稿で示された。さらに,セカンド・チャンスを与えられていると思っている生徒ほど,または将来の仕事の展望がみえる生徒ほど,その学習時間が長くなることが確認された。このことは,ITEが「敗者」の生徒たちにセカンド・チャンスを与え,将来の仕事の展望を描けるようにさせることを通して,再加熱装置として機能している可能性が高いことを示唆している。

「敗者」たちがITE への入学後にアスピレーションが上昇する背景としては次のことが考えられる。まず教育省とITE 本部での聞き取り調査によれば,シンガポールの教育体系には「敗者復活トンネル」が構造的に組み込まれているのである。すなわち,各コースの最終段階で成績の優秀な生徒はワンランク上のコースや教育機関へ進学できるようになっており,がんばりさえすれば大学を終点とする進学経路中で袋小路にぶつかることはないようになっている。中等後教育段階において,「敗者」に与えられる「復活トンネル」は図2に示す通りである。

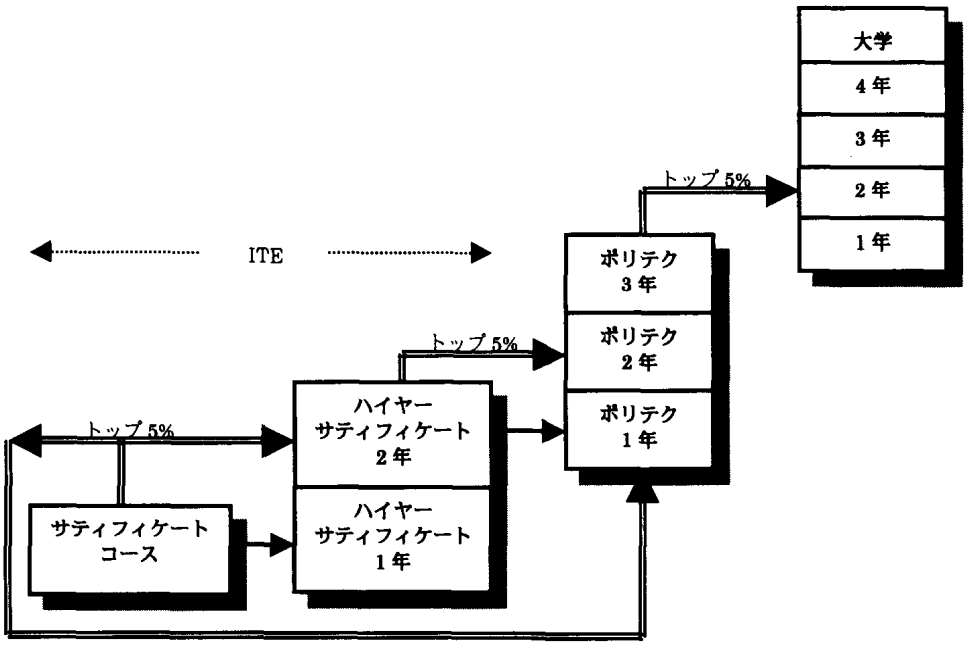

図2　中等後教育段階における「敗者復活トンネル」

図2をみると,成績がトップ5%のサティフィケートおよびハイヤー・サティフィケートのコースの卒業生は,それぞれハイヤー・サティフィケートのコースとポ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

リテクの2年目に編入できるようになっている。またトップ5％でない卒業生でも，成績がある水準に達していれば，編入先の定員数が許す限り，ワンランク上のコースの1年目に編入することができる。「シンガポールの教育は『敗者』にセカンド・チャンスを与える制度だ」という質問に対して，多くのITE生徒が「そう思う」と答えたのもこの「復活トンネル」が存在しているためである。このように「敗者」たちの目にみえる形で「復活トンネル」が前提として存在しなければ，いくら「がんばれ」と叱咤激励してもただの空回りで終わることだろう。

さらに，ITEでは，卒業生の「サクセス・ストーリー」に関する出版物などを通して，生徒たちのアスピレーションを再活性化させようと多大な努力を払っていることも聞き取り調査で明らかになった。このことについて，本調査の対象校の一校であるITEのB1校の校長は，「彼ら（ITEの生徒たち）に技術を教えるだけではない。実際に，教育制度において能力がそれほど高くないとみなされている彼らの自尊心（self-esteem）を再建することもしている……これはITE教育に関するもうひとつの見方といえよう」と述べた。

ITEへ入学する前の「敗者」たちのほとんどは，能力別コースが並存する小・中学校段階で常に下位コースに配属され，否でも応でもレッテルが貼られてしまい，自分の能力が「それほど高くない」と気づかされる。ところが，ITEへ入学した後，彼らは小学校5年生以来はじめて同級生と差異化されずにすむばかりでなく，彼らのアスピレーションを再加熱させようとするITEの努力によって「敗者復活トンネル」の存在がより明確なものになると考えられる。'It's The End' といわれ続けてきたITEを通しても「敗者復活」ができると気づいたときに，彼らのアスピレーションははね上がり，それにともない進学に向けてエリートに匹敵できるほど長い学習時間を費やすのである。

それだけではない。ITEが提供する復活トンネルは，すでに冷却されてしまったアカデミックな能力を基準とした選抜ルートとは違い，あくまでも技術能力を基準にITEからポリテクへ，ポリテクから大学へと進学できるルートなのである。すなわち，小・中学校における競争とは手段も評価基準も異なるように，競争の中身を変えることによって，ITE生徒にとっても「これなら，今までダメだった私にもできるかもしれない」という考えを持たせ，アスピレーションを再加熱させるのである。しかも，そこでの選抜基準は就職に役立つ実用性の高い技術能力とも重なっている。したがって，ITE生徒にとっては，将来の仕事の展望をより明確に描きやすくすると考えられるのである。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ところで，「敗者」のための技術教育校と聞くと，設備はきっと第三世界によくあるスウェットショップのようなものと思われがちであるが，本調査でITEの学校を見学したところ，そこは最新機械・機器がずらりと並び，建物も非常に近代的できれいに整備されている立派なものであった。またそこに設置されているコースは，E・コマース，化学プロセス技術やマルチメディア技術などに代表されるように，技術レベルの高度なものがほとんどである。シンガポールの教育事情を知っている人でなければ，まさかそこが「行き止まり」とよばれる技術教育校だとは誰も思わないのだろう。シンガポール政府によるITEへの厖大な投資や関心も，生徒たちの学習意欲や自信回復につながっていると考えられる。

当然のことながら，ITE卒業生にとって，ポリテクやその上の教育機関への進学機会は，「求める者は与えられる」ほど多くはない。ITEが行う卒業生調査によれば[11]，多くのITE生徒が進学を望んでいるのに対し，これまでのITE卒業生のなかに，ディプロマかそれ以上の学歴を獲得した者は4割に止まっている。この4割という数字が少ないのか多いのかについての判断は，見方によって異なるのであろう。しかしこれまでほとんど下位コースをたどってきた「敗者」たちに対して，手に職をつける機会を与えるばかりでなく，彼らの学習意欲やアスピレーションをも再加熱させることができるだけでも，ITEの役割は非常に大きいといえよう。なぜなら，ここでいうアスピレーションは必ずしも進学アスピレーションに限るものではなく，将来につなぐための「やる気」や活力をも意味するものだと考えられるからだ。もしITEという機関がなければ，「敗者」たちは，アスピレーションの冷えたままに社会に出てしまい，将来の展望が持てない，活力のない人間を社会全体が抱え込んでしまうことになろう。

「敗者」をめぐるこれまでの理論は決定的な選抜を比較的遅い時期に行う教育体系を中心に展開されてきた。そのような教育体系において，それまでアスピレーションを高く加熱されてきた「敗者」に対して，選抜後に今度は冷却装置をしかけるとクラークはアメリカのコミュニティ・カレッジでの調査に基づいて説明した。しかし本調査で明らかになったように，「敗者」におけるアスピレーションの変化は，選抜時期の早晩によってだけでなく，競争の中身や手段によっても異なってくる。アカデミックなルートに適しない者を早期に選び出し，彼らに別の競争ルートを提供することによって，「敗者」のアスピレーションを再燃させてしまうシンガポールのこのような一元的ではない競争制度は非常に巧みであるといえる。アメリカのコミュニティ・カレッジもシンガポールのITEも「敗者」を受け持つという意味で教育

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

体系における役目は似ているものの，前者が「敗者」の自己概念を傷つけないように夢を冷ますのに対し，後者は自己概念がすでに傷ついたのであろう「敗者」に夢を与えるといえよう。

この数年，日本では階層格差の拡大やその可能性が高まっているとする指摘が盛んに行われている（佐藤　2000；苅谷　2001など）。特に佐藤は最近の日本が「がんばってもどうにもならない」という諦めムードが高まっているという危機感を表明し，学歴以外で評価される別のルートの構築を提案している。それに対して，シンガポールでは，より高い学歴を得るルートを，アカデミックな評価基準に代わり，技術能力を基準にすることで，「敗者」≒低い階層出身者にも「どうにかなる」という意識をつくり出している。このITE の果たしている役割をみなおすことは，日本の現状打破の一助となるかもしれない。

〈注〉

(1) 2002年におけるシンガポールでは，1校のアドベンティスト（キリスト再臨派）学校と6校のマドラサ（イスラム宗教学校）を除けば，すべての小・中・高学校は国公立校ないし政府補助立校であり，シンガポール教育省が設けるナショナル・カリキュラムに基づいて授業を行う。'Report of the Committee on Compulsory Education in Singapore'（Jul 2000）によると，私立宗教学校に入学した者の割合は同年齢人口の1％にも満たない。

(2) 教育に対する強い統制のなか，本調査がシンガポール教育省の承認とサポートを得られたことは非常に貴重であるといえよう。ただし，本調査を承認する条件として，調査質問紙の中から生徒の人種や宗教に関する項目が教育省によって削除された。

(3) シンガポールでは，中等教育（Secondary Education）は中学校の期間のみを指しており，その次なる教育段階は中等後教育（Post-secondary Education）とされる。

(4) 高校レベルにあたる GCE 'A'（Advanced）レベルの正式な名前は「シンガポール・ケンブリッジ一般教育証書・上級教育修了資格」（The Singapore-Cambridge General Certificate of Education-Advanced Level）であり，試験はシンガポール教育省とケンブリッジ大学試験機構との共同によって毎年行われる。同じように，中学校レベルにあたる GCE 'O' レベルと 'N' レベルはそれぞれ 'Ordinary Level' と 'Normal Level' の略で，前者よりも後者のほうのレベルが

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

低い。

(5) 小学校5年から始まるEM 1・2・3コースの'E'と'M'はそれぞれ'English'（英語）と'Mother Tongue'（母語）の頭文字であり，また1・2・3は言語のレベルを指している。EM1の生徒が英語と母語をともに第一言語レベルで学習するのに対して，EM2の生徒は英語を第一言語，母語を第二言語レベルで学習する。EM3の生徒に関しては，英語を基礎レベル，母語を会話レベルで学習する。

(6) 国勢調査Census-2000によれば，2000年におけるシンガポールの平均世帯月収はS$4943であった（2003年11月現在，S$1≈¥65）。

(7) シンガポール教育省の要求で生徒の人種に関する項目が質問紙から削除されたが，聞き取り調査によると，ITE生徒の人種構成が中国系60%，マレー系30%，インド系10%となっており，国レベルの人種分布に比べ，マレー系の比率が倍以上であることがわかった。

(8) 教育年数については，小・中学校段階に関して「'N'か'O'レベル＝10」「ITE＝12」「ポリテク＝13」「JCか大学＝16」「修士かそれ以上＝18」とした（注：JCにおける実際の教育年数は12年ではあるが，JCは大学へ進学するための学校であることから，大学と同じ16年にした。これはITEとポリテクへの進学よりもJCへ行くことのほうがアスピレーションが高いことを表すためでもある）。ただし，現在段階においては，JCの「市場価値」がポリテクに近いことから，ポリテクと同じ13年にした。

(9) 「（一日あたり）平日における放課後の勉強時間」をたずねた質問をもとに，「しない＝0分」「30分以下＝15分」「30分から1時間＝45分」「1時間から2時間＝90分」「2時間から3時間＝150分」「3時間から4時間＝210分」「4時間から5時間＝270分」「5時間以上＝330分」とした。

(10) しかも，学習時間の数量化について，日本の場合は，「30分以下＝30分」「30分から1時間＝60分」とし，シンガポールの場合より高い値を与えている（ほかの時間帯についての数量化は同じであった）。

(11) 2002年11月10日にITE創立10周年記念ディナーで，当時の教育相兼第二国防相テオ・チーヒン少将のスピーチによる。

〈引用・参考文献〉

Chang J. Han-Yin 2002, "Differential Educational Attainment and Its Impact on Social Stratification," *Working Paper* No. 163, Department of Sociology,

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

National University of Singapore.

Clark B. 1960, "The 'Cooling Out' Function of Higher Education," *American Journal of Sociology,* 65, pp. 569-576.

Cummings W. and Altbach P. 1997, *The Challenge of Eastern Asian Education: Implications for America,* State University of New York Press.

Green A. 1997, *Education, Globalization and the Nation State,* MacMillan Press.

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編　2000,『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。

Hopper E. 1968, "A Typology for the Classification of Educational Systems, " *Sociology,* 2, pp. 29-46.

池田充裕　1999,「シンガポールにおけるマイノリティ教育政策——マレー系住民に対する教育支援政策を中心にして」日本教育制度学会編『教育制度学研究』第6号，202-219頁。

Karabel J. 1977, "Community Colleges and Social Stratification: Submerged Class Conflict in American Higher Education," *Harvard Educational Review,* 42, pp. 521-562, (=1980，潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳「コミュニティ・カレッジと社会階層」『教育と社会変動　下』東京大学出版会).

苅谷剛彦　1991,『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会。

———　2001,『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂。

中村高康・藤田武志・有田伸編著　2002,『学歴・選抜・学校の比較社会学——教育からみる日本と韓国』東洋館出版社。

大原始子　1997,『シンガポールの言葉と社会——多言語社会における言語政策』三元社。

Quah Stella R, Chiew Seen Kong, Ko Yiu Chung, Lee Sharon Mengchee 1991, *Social Class in Singapore,* Times Academic Press.

Rodan G. 1989, *The Political Economy of Singapore's Industrialization,* Palgrave Macmillan.

Rosenbaum J. 1976, *Making Inequality: The Hidden Curriculum of High School Tracking,* Wiley.

佐藤俊樹　2000,『不平等社会日本』中公新書。

竹内洋　1995,『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

田村慶子　1993,『頭脳国家——超管理の彼方に』講談社現代新書。

Turner R. 1960, "Sponsored and Contest Mobility and the School System," *American Sociological Review* 25, pp. 855-867.

Young M. 1958, *The Rise of the Meritocracy,* Thames and Hudson.

Zhang Xin Xiang 1993, "Education as a Vehicle for Social Stratification Change: The Case of Singapore," *Working Paper* No. 118, Department of Sociology, National University of Singapore.

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ABSTRACT

A Sociological Study on the Educational System and Meritocracy of Singapore: The Institute of Technical Education as a Rewarming-Up Apparatus

SIM, Choon Kiat

(Graduate School of Education, The University of Tokyo)

7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan

Email: simsimjapan@hotmail.com

Focusing on the rigorous selective educational system of Singapore, this paper aims to paint a profile of the 'losers' produced by the system and elucidate the role of the Institute of Technical Education (ITE) where 'losers' are enrolled.

Based on survey data gathered from students studying at ITE and elites attending Junior Colleges, this study first illustrates the facts that there is a lack of mobility between different tracks in Singapore's educational system, and that the influence of social classes on education exists even in meritocratic Singapore. Nonetheless, it is shown that despite the lower social classes and academic achievements of the 'losers,' not only does their aspiration rise upon admission into ITE, but the average time they spend on studies is comparable to that of the elites. This study further demonstrates that the notion of being given a second chance and the ability to see the prospects for a future job determine the average study hours of the 'losers.' It is thus concluded that there is a strong possibility that ITE functions as a rewarming-up apparatus. Possible factors contributing to the rise of aspirations among the 'losers,' including the efforts put in by ITE, are discussed at the end of the paper.

Singapore's educational system is unique in that while the selection process may be rigorous, even the 'losers' perform well in international comparative studies on academic ability. Furthermore, it fits neither the European model of sponsored mobility nor the US-Japan model of contest mobility. Hence, by unraveling the process of how 'losers' adapt to failure in a competitive system such as Singapore's, this study hopes to bring fresh viewpoints to existing theories concerning educational selection process as well as 'losers' in the field of Sociology of Education.

NII-Electronic Library Service